

日本と韓国における子育てに関する 親の心理的要因と子どもの効力感の関連の比較

鈴木 眞 雄

(心理学教室)

姜 永 吉

(大韓民国・釜山科学高等学校)

鈴木 雅 邦

(名古屋市・大高中学校)

Comparison of the Relations between Parental Psychological Factors concerning with Child-rearing and Efficacy Feeling of Children in Japan and Korea

Masao Suzuki

(Department of Psychology)

Young Kil, Kang

(Pusan High school of Science, Pusan, Republic of Korea)

Masakuni Suzuki

(Ohdaka Junior High School, Nagoya)

ABSTRACT

The purpose of this report is to compare the relations among parental psychological factors concerning with child-rearing and efficacy feeling of children in Japanese and Korean parent-child relation. The psychological factors were parental belief system, perception of family environment, attitude toward child-rearing and locus of control. Belief system, cohesiveness of family and expression of emotional feelings differently assessed between Japanese and Korean. Korean mother attached importance to discipline and not to child centered rearing. Perception of family environment by child showed strong correlation with efficacy feeling, especially cohesiveness of family. Korean daughter perceived the family environment like her

mother. There results suggested the difference of belief, attitude, efficacy feeling, and parent-child relation between Japan and Korea.

問題・目的

松田・鈴木(1988)は、家族環境のなかでの発達という視点から、子どもの効力感の発達と、親の養育態度、および家族関係(家族環境)との関連についての分析を行い、全体的には不明確であったが、特に、子どもの家族環境の認知の在り方が、子どもの効力感の在り方に関連することを見出だした。その結果をもとに、子どもの効力感に関連する親の心理的要因間の関係の構造を図示した(松田・鈴木・富永, 1989)。そこで、3年生では母親の信念の影響が強く、5年生になると、とくに男児に父親の影響が強いという知見が得られた。

児童の効力感の発達については、松田・鈴木(1990)が、米国の結果と同様に、学年の上昇とともに低下していくことを報告した。しかし、効力感の低下が、韓国の児童では見出だせなかった(鈴木・姜・鈴木, 1991)。

そこで、本報告では、日本と韓国の間において、子育てに関する信念体系・家族環境の認知について比較し、さらに松田・鈴木(1988)と同じ分析により、親の認知した家族環境、養育態度と子どもの効力感、子どもの認知した家族環境の関連を比較し、親の信念体系と効力感を取り巻く構造図(松田・鈴木・富永, 1989)をより確かなものにしていくことを目的とする。

方法・手続き

韓国における調査

調査対象：釜山市ネソン国民学校、厳弓国民学校3年生～6年生(132名)。

サジク女子中学校1年生～3年生(117名)。

その母親と父親。

調査時期：1989年9月。

調査方法：学級において、担当教師が実施。

母親・父親には、担当教師より児童を通じて配布し、児童を通じて回収。

調査内容：母親・父親に対して：松田・鈴木(1989)の調査の韓国語版を作成。

家族の一般的特徴(母親のみ)。

家族環境について(9下位尺度, 45項目)。

子育てに関する信念体系(11尺度, 41項目)。

統制の所在(内的・外的 各9項目)。

児童生徒に対して：松田・鈴木(1989)の調査の韓国語版を作成。

効力感(鈴木・姜・鈴木(1991)に韓国語版を掲載)。

家族環境、親の養育態度。

日本における調査

松田・鈴木(1988)、松田・鈴木・富永(1989)、松田・鈴木(1990)に記載。

Table 1 日本と韓国における母親の信念体系の評定平均・標準偏差

信念体系の下位尺度	国 子どもの学年(年度) 母親の人数			日本			韓国			日韓の差	学年の差
	小3(87) N=42	小5(89) N=42	中1(89) N=21	小3(89) N=63	小5(89) N=89	中1(89) N=32	小3(89) N=63	小5(89) N=89	中1(89) N=32		
1 権威主義－民主的・平等主義	8.8 2.30	8.6 2.02	9.1 2.22	10.9 2.30	10.7 2.98	10.6 2.65				**	
2 子ども自発性尊重－外発性尊重	13.6 2.53	14.1 2.50	14.5 2.40	12.8 2.50	12.4 2.65	12.9 2.15				**	
3 子ども教化重視－自己統制尊重	12.4 2.67	12.4 3.20	11.5 1.96	13.7 2.60	13.2 2.65	11.9 2.05				*	**
4 親の責任自覚－社会の連帯	8.8 1.72	8.7 1.97	8.9 1.80	8.2 1.88	8.3 1.83	8.2 1.36				*	
5 子育て生きがい－生きがい平行	5.8 1.70	6.0 1.65	6.3 1.61	7.8 1.51	8.0 1.78	7.7 1.78				**	
6 仲間関係自発性尊重－親の配慮	9.9 1.86	10.3 1.53	10.2 1.63	8.3 2.29	8.7 2.22	8.8 1.45				**	
7 仲間関係重視－仲間関係非重視	9.8 1.56	9.9 1.31	9.5 1.47	8.9 1.96	8.9 2.08	8.6 1.97				**	
8 遺伝・初期環境重視－相互作用	5.3 1.57	5.0 1.34	5.7 1.58	6.4 1.76	6.3 1.63	6.6 1.54				**	
9 遊び重視－勉強重視	9.6 1.79	9.7 1.67	9.0 1.63	7.4 1.94	7.3 2.12	6.7 1.61				**	*
10 早期技能教育－自由・遊び重視	7.3 2.17	7.2 2.34	6.9 2.09	8.0 1.91	7.6 2.12	7.7 1.67				*	
11 教化主義－モデル呈示主義	12.0 2.31	12.1 1.63	11.7 0.89	12.7 1.85	12.5 1.88	12.6 1.63				**	

注 **P<.01, *P<.05

Table 2 日本と韓国における父親の信念体系の評定平均・標準偏差

信念体系の下位尺度	国 子どもの学年 父親の人数			日本			韓国			日韓の差	学年の差
	小3(87) N=42	小5(89) N=42	中1(89) N=21	小3(89) N=61	小5(89) N=89	中1(89) N=33	小3(89) N=61	小5(89) N=89	中1(89) N=33		
1 権威主義－民主的・平等主義	9.9 2.67	9.2 2.61	9.4 3.63	11.1 1.93	11.4 2.84	10.3 2.68				**	
2 子ども自発性尊重－外発性尊重	13.8 2.36	14.1 2.63	14.0 2.92	12.5 2.24	12.3 2.56	13.5 2.32				*	
3 子ども教化重視－自己統制尊重	12.5 2.26	12.2 2.49	12.3 2.25	13.6 2.50	13.6 2.53	12.3 2.52				*	
4 親の責任自覚－社会の連帯	9.4 1.96	9.0 2.09	9.3 2.49	8.3 1.89	8.0 1.75	8.5 1.67				*	
5 子育て生きがい－生きがい平行	6.5 1.92	6.3 2.00	6.5 2.62	7.6 1.61	7.6 1.73	8.0 1.77				*	
6 仲間関係自発性尊重－親の配慮	10.0 1.78	10.3 1.61	10.4 2.30	8.2 1.72	8.2 2.02	8.0 2.07				**	
7 仲間関係重視－仲間関係非重視	9.7 1.49	9.7 1.83	9.8 1.46	8.4 1.95	8.7 1.92	8.7 2.05				*	
8 遺伝・初期環境重視－相互作用	5.7 1.68	5.1 1.71	5.7 1.49	6.8 1.78	6.3 1.70	6.3 1.95				*	
9 遊び重視－勉強重視	9.3 1.95	9.0 1.93	9.5 1.63	7.1 1.82	7.1 1.92	6.8 1.95				**	
10 早期技能教育－自由・遊び重視	6.8 2.21	7.1 2.26	6.8 2.24	7.5 1.68	7.7 2.10	7.6 2.05				*	
11 教化主義－モデル呈示主義	11.2 1.85	11.7 1.84	11.8 2.21	13.2 1.63	12.8 2.13	12.5 1.64				*	

注 **P<.01, *P<.05。

結果・考察

1. 親の信念体系の比較

母親の信念体系の評定平均と標準偏差を Table 1 に、父親の信念体系の評定平均と標準偏差 Table 2 に示す。評定値の取りうる得点の幅は、尺度 1・2・3・11 が 5～20 で、中間値が 12.5 となる。残りの尺度 4～10 については、得点の幅は、3～12 で、中間値は、7.5 となる。評定平均値が、中間値よりも大きければ下位尺度の名の左側の傾向を示し、中間値よりも低ければ、右側の傾向を示す。

尺度 1 の権威主義－民主的・平等主義の傾向は、日本も韓国も民主的ではあるが、韓国のほうが民主的・平等的傾向は弱く、強いていえば韓国のほうが権威主義的となる。尺度 2 については、日本の母親が子どもの自発性を尊重し、韓国の母親は「子どもというものは、外からいろいろ刺激を与えないと、学んでいこうとはしないものだ」「子どもは、放っておかれると、無駄なことをして時間をつぶしているものだ」と信じている。この例にみるようにすべての尺度において、日本と韓国の差がみられた。さらに、子どもの学年の上昇に伴って差が見られた尺度は 3（子どもの教科重視－自己統制尊重）と 9（遊び重視－勉強重視）であり、母親は、日本においても韓国においても、子どもの学年が進むと、勉

強を重視するようになる。これらの結果から、韓国の母親は、日本の母親よりも権威主義的で、遊びや子どもの自発性を尊重するよりも、親による教化を重視し、勉強に駆り立てる傾向が強い。父親についても同様の結果が得られた (Table 2)。

この日本と韓国の親の意識の違いを理解しやすくするため、金 (1987) の調査結果の要約 (杉山・桜井, 1990) を引用する。「第一に重要なのは自己と他人との関係であって、親しい人たちの私生活にまで自分が強く関与しようと意識が非常に高い。だから他人のことにすぐ口出しするのだが、自分のことに他人が口出しするのを非常に嫌う。こうした傾向のもとになっているのは、韓国人の自己中心性であり、他人の状況にたいする客観的な認識は甚だ弱い。そして韓国人の意識の深層には権威主義、利己性、無秩序意識等々が存在している。またいろいろな特性は年齢および教育程度による差が大きく、育った地域の差はそれほどおおきな条件とはなっていない。」

2. 親の家族環境の認知の比較

母親・父親が認知した夫婦関係・家族環境の認知統制の所在の評定平均値と標準偏差を Table 3 に示す。尺度 1～9 までは、得点の幅が 5～20 で、中間値は 12.5 となる。尺度 10・11 は、それぞれ 9～36、中間値は、22.5 となる。その結果、日本と韓国の間で、母親・父親ともに差が見られたものは、夫婦関係のうち、2 夫婦の親和関係で、日本のほうが韓国よりも夫婦の親和の程度は高いと認知し、4 家族の凝集性も高いと評定している。統制の所在では、韓国の親のほうが、11 外的統制の傾向が強く、金 (1987) の指摘による「韓国人の自己中心的傾向と客観的認識の弱さ」と一致していると思われる。父親の評定では、日本と韓国の間には、母親の場合よりも、差のある尺度が多く、日本の父親は、夫婦は相談しあい、お互いの気持ちを理解しあっていると判断し、家族は、言いたいことが言える雰囲気、知的・文化的活動さらには、社会的・娯楽的活動をよく行なっていると思っている。これらの結果から想像される夫婦・家庭の一般的イメージは、日本のほうが、夫婦平等・対等の傾向が強く、子ども中心の家庭で、家族の凝集性を常に気に掛けている親の

Table 3 日本と韓国における「夫婦関係」・親の「家族環境」の認知・「統制の所在」の比較

母親・父親 日本・韓国 家族環境の認知の下位尺度	母 親		差の検定	父 親		差の検定	日本 母父 差	韓国 母父 差
	日 X	SD		日 X	SD			
夫婦関係								
1 夫婦の勢力関係	14.8	3.03		16.3	2.69	*	*	*
2 夫婦の親和関係	14.9	3.30	**	16.2	2.81	**		**
3 夫婦の調和	14.1	3.18		14.5	2.76	**		
家族成員の相互関係								
4 凝集性	16.7	2.43	**	17.1	2.50	**		
5 感情表出性	16.7	3.04		17.3	2.60	*		
家族システム維持								
6 組織化・構造化志向	14.5	2.44		14.7	2.80			
7 統制	13.5	2.89		14.0	2.63			
個人的成長の志向性								
8 知的・文化的志向	10.9	3.35		11.5	2.80	*		
9 社会的・娯楽的活動志向	12.9	2.85		13.2	2.78	**		
統制の所在								
10 Internal	25.8	4.12		25.5	5.03			
11 External	25.4	3.62	**	25.4	4.53	*		

注 ** $P < .01$, * $P < .05$ 。

Table 4 家族環境についての子どもの認知と親の認知の関係（韓国）
（数字は偏差積率相関係数，小数点は省略）

親の認知		母親の認知した家族環境				父親の認知した家族環境			
		夫 婦 の 親和関係	夫 婦 の 調和関係	凝 集 性	感 情 表 出 性	夫 婦 の 親和関係	夫 婦 の 調和関係	凝 集 性	感 情 表 出 性
男児の認知	両親の親和関係	-010	-010	101	163	-130	200	121	213
	凝 集 性	024	-055	021	193	-088	-035	080	432*
	感 情 表 出 性	-155	-404*	-231	018	-252	-304*	-110	220
女兒の認知	両親の親和関係	212	423**	428**	246	063	236	444**	096
	凝 集 性	288	449**	504**	432**	028	212	447**	029
	感 情 表 出 性	202	377**	463**	379**	111	051	281	053

注 **P<.01で有意，*P<.05で有意。

男児，n=33，女兒，n=46。

姿がより鮮明となってくる。

3. 親の認知した家族環境と子どもの認知した家族環境との対応

親と子どもの家族環境の認知のあり方について，対応する項目のみについて，相関を求め，Table 4 に示した。松田・鈴木（1988）との比較を行なうため，5年生とその母親・父親のみを分析の対象とした。

1) 韓国の親と子どもの対応

ここに示された結果は，男児と女兒の間に大きな違いがみられる。男児の認知した家族環境と親の認知した家族環境のうち，有意な正の相関がみられたのは，凝集性と感情表出性のみで，母親・父親の認知した夫婦の調和関係と感情表出性とはいずれも負の相関がみられた。しかし，女兒においては，母親と全般的に相関は高く，なかでも凝集性，感情表出性などにおいて，かなり高い相関がみられ，家族環境の認知に関連性の高いことが注目される。父親との関連においては，凝集性において高い相関がみられた。これらのことは，児童期後期の子どもにおいて，特に女兒において，実際の家族関係の様相がかなりの確に捉えられ，家族環境の認知が，親子関係の研究に重要な手がかりであることを示唆している。

2) 日本と韓国の比較

親と子どもの認知の相関については，Table 4 と松田・鈴木（1988）の結果（Table 7）と比較すれば，その違いは一目瞭然である。日本では，わずかではあるが，女兒と父親との間に凝集性をはじめとして，親和関係についても，その判断の関連性が高いことが注目された。しかし，韓国では，女兒と母親の間に強い関連がみられた。さらに，男児と母親の関連は，日本では，凝集性と夫婦の調和関係において正の相関がみられた。韓国においては，母親・父親の夫婦の調和関係と男児の凝集性の認知において，負の相関がみられた。この違いは，今後の児童期・青年期の比較研究に新たな視点を提供することになろう。

4. 子どもの認知した家族環境と効力感

1) 韓国の結果

韓国の父母別に，親が自ら認知している家族環境と，子どもの効力感との相関を求めたのが，Table 5 および Table 6 である。父親の家族環境の認知と子どもの効力感の間に有

Table 5 母親の認知した家族環境と子どもの効力感との関係（韓国）
（数字は偏差積率相関係数，小数点は省略，n=79）

子どもの効力感 母親の認知した 家族環境	認 知 的 領 域		社 会 的 領 域	
	積極的・自己 肯定的・内的 統制因子	消極的・自己 否定的・外的 統制因子	遊び場面での 積極的・自己 確信的行動	危機的・ジレン マ的場面での 自己確信的 行動
夫 婦 の 勢 力 関 係	142	126	162	040
夫 婦 の 親 和 関 係	023	186	035	−081
夫 婦 の 調 和 関 係	097	136	119	092
嫌 集 性	248*	281*	204	240*
感 情 表 出 性	261*	309**	244*	141
社 会 的 ・ 構 造 化 志 向	282*	146	196	213
統 制	038	148	013	008
知 的 ・ 文 化 的 志 向	134	090	013	290*
社 会 的 ・ 娯 楽 的 志 向	−034	056	145	191

注 **P<.01, *P<.05で有意。

Table 6 父親の認知した家族環境と子どもの効力感との関係（韓国）
（数字は偏差積率相関係数，小数点は省略，n=79）

子どもの効力感 父親の認知した 家族環境	認 知 的 領 域		社 会 的 領 域	
	積極的・自己 肯定的・内的 統制因子	消極的・自己 否定的・外的 統制因子	遊び場面での 積極的・自己 確信的行動	危機的・ジレン マ的場面での 自己確信的 行動
夫 婦 の 勢 力 関 係	−031	−094	092	−067
夫 婦 の 親 和 関 係	063	−060	071	099
夫 婦 の 調 和 関 係	061	−048	096	010
嫌 集 性	162	097	022	134
感 情 表 出 性	188	125	161	085
社 会 的 ・ 構 造 化 志 向	084	151	−043	000
統 制	141	067	−006	104
知 的 ・ 文 化 的 志 向	173	030	022	113
社 会 的 ・ 娯 楽 的 志 向	106	−140	−033	115

注 **P<.01, *P<.05で有意。

意な相関を見出だすことはできなかったが，母親の認知した家族環境のうち凝集性・感情表出性・社会化・構造化志向と認知的領域の効力感との間に相関がみられ，わずかではあるが，社会領域においても凝集性・感情表出性との間に相関がみられた。また，知的・文化的志向と危機的場面での自己確信的行動に相関がみられた。ここでも，親と子どもの認知の関連と同様に，家族環境の認知のうちに凝集性・感情表出性が重要な意味をもっている。

2) 日本と韓国の比較

日本の結果は，松田・鈴木（1988）の結果（Table 3, Table 4）のように，母親の「社会化・構造化志向」と社会領域の効力感の相関が報告されているが，韓国では，母親の認知と認知的効力感に相関がみられたことは，注目すべき結果である。日本より韓国の母親の家族のまとまりのほうが，子どもの効力感に与える影響が大きいことを示唆するものである。

Table 7 子どもの認知した親の養育態度と子どもの効力感との関係（韓国）
（数字は偏差積率相関係数，小数点は省略）

子どもの認知 親の養育態度		認 知 的 領 域		社 会 的 領 域	
		積極的・自己 肯定的・内的 統制因子	消極的・自己 否定的・外的 統制因子	遊び場面での 積極的・自己 確信的行動	危機的・ジレンマ的場面での 自己確信的 行動
男児 (n=33)	母親の養育態度				
	受容的子ども中心的	403*	325	376	548**
	統制的関わり	018	-271	299	258
	責任回避的関わり	143	132	076	-121
	父親の養育態度				
	受容的子ども中心的	348*	347*	634**	280
女児 (n=46)	統制的関わり	131	-187	148	050
	責任回避的関わり	-057	064	097	064
	母親の養育態度				
	受容的子ども中心的	310	284	208	420**
	統制的関わり	066	-262	-084	-094
	責任回避的関わり	125	-024	192	210
	父親の養育態度				
	受容的子ども中心的	231	161	148	264
	統制的関わり	006	-303	-028	056
	責任回避的関わり	001	190	063	120

注 **P<.01, *P<.05で有意。

5. 子どもの認知した親の養育態度と効力感

1) 韓国の結果

子どものみを対象に両親の養育態度の評定と子どもの効力感の評定の相関を求め、男女別に Table 7 に示した。この結果、男児の認知的領域において、母親、父親ともにその「受容的・子ども中心的」態度が、積極的・自己肯定的・内的統制傾向と有意な正の相関を示し、消極的な効力感においても正の相関を示した。社会的領域においても受容的態度との関連がみられた。女児においては、受容的態度と社会的領域の危機的場面のみで自己確信的行動と正の相関がみられた。これらの結果から、子どもから「受容的で子ども中心的である」と認知される親の養育態度が子どもの効力感と関連していることが示唆される。

2) 日本と韓国の比較

日本と韓国の結果は、男児においては松田・鈴木（1988）の結果（Table 6）と比較するまでもなく、ほぼ同じ結果であるが、女児については、日本と韓国の間に違いがみられた。韓国のほうが、有意な相関のあらわれ方は少なく、明確なパターンは見出だし難い。

6. 子どもの認知した家族環境と子どもの効力感

1) 韓国の結果

子どもを対象に、家族環境の諸領域の中で、子どもの回答の得られそうな側面に限定して調査した。Table 8 に結果を示したが、全般的には、親の認知の場合とは異なり、子ども自身の家族環境の認知にあり方が、効力感と密接に関連していることが示された。男児・

Table 8 子ども認知した家族環境と子どもの効力感との関係(韓国)
(数字は偏差積率相関係数, 小数点は省略)

子どもの効力感 子どもの認知 した家族環境		認知的領域		社会的領域	
		積極的・自己 肯定的・内的 統制因子	消極的・自己 否定的・外的 統制因子	遊び場面での 積極的・自己 確信的行動	危機的・ジレン マの場面での 自己確信的 行動
男児 (n=33)	両親の親和関係	457**	215	292	367*
	凝集性	631**	467**	530**	588**
	感情表出性	400*	321	497**	531**
女児 (n=46)	両親の親和関係	359*	234	245	437*
	凝集性	458**	371*	400*	486**
	感情表出性	541**	405*	405*	545**

注 **P<.01, *P<.05で有意。

Table 9 子どもの効力感と親の Locus of Control の関係(韓国)
(数字は偏差積率相関係数, 小数点は省略)

子どもの効力感 親の Locus of Control		認知的領域		社会的領域	
		積極的・自己 肯定的・内的 統制因子	消極的・自己 否定的・外的 統制因子	遊び場面での 積極的・自己 確信的行動	危機的・ジレン マの場面での 自己確信的 行動
男児 (n=33)	母親の L o C	-117	-254	-147	-211
	父親の L o C	-101	-093	-209	-417*
女児 (n=46)	母親の L o C	129	046	-120	-000
	父親の L o C	-254	036	028	-107

注 **P<.01, *P<.05で有意。

女児ともに、凝集性をもっとも効力感と関連が強く、親の家族環境の認知と効力感の関連の存在が、より確かなものとなった。

2) 日本と韓国の比較

この結果は、松田・鈴木(1988)の結果と同様の結果で、これまでの結果を全体的に見れば、「子どもの効力感と関連の強いものは、子どもの認知した親の養育態度よりも子どもの家族環境の認知」であり、構造図の洗練にとって有効な知見と期待される。

7. 親の自己自身の Locus of Control の認知と子どもの効力感

1) 韓国の結果

親が自分自身の Locus of Control について評定した得点と、子どもの効力感の得点についての相関を求めたところ、Table 9 に示したように、全般的に低い相関係数が示された。しかし、男児の場合に父親の Locus of Control と社会的領域の危機的場面での効力感とは有意な相関がみられた。これは、今後の調査の有効な手がかりとなるものであろう。

2) 日本と韓国の比較

日本の結果は、全体的にみれば韓国の結果とほぼ同じものであったが、母親の Locus of Control と認知領域の効力感のみに有意な相関がみられた。韓国では、父親と社会的領域効力感と負の相関がみられた。これらの結果を統一的に解釈するほどの明確な情報がないので、今後の調査研究に依らねばならない。

ま と め

本報告の目的は、子育てに関する親の信念体系・家族環境の認知・統制の所在と子どもの効力感・家族環境の認知・親の養育態度との関連を、日本と韓国の間で比較・分析することである。これまでの報告において採用された分析と同じ分析を、韓国の小学校5年生とその両親の回答に適用した。その結果、日本と韓国の親の信念体系は全面的に違いがみられ、さらに家族環境の認知においても、凝集性・感情表出性において差がみられ、韓国の家庭は、日本よりも親の教化を重視し、子ども中心の傾向は弱い。また、これまでの知見と同様に、子どもの家族環境の認知が、養育態度の認知よりも効力感と強く関連しており、なかでも凝集性の認知が重要な働きをしていることが示唆された。さらに、韓国の母－女兒においては、日本の場合より、家族環境の認知の関連が強く、また効力感との関連においても、母親の影響が明らかとなった。これらの結果から、日本と韓国においての親の信念体系と子どもの効力感の関連は、異なるものであると言っても過言ではない。

(平成3年9月17日受理)

引用文献

- 金在恩 1987 韓国人の意識と行動様式 梨花女子大出版部。
- 松田 惺・鈴木眞雄 1988 家族環境及び親の養育態度と児童の効力感 愛知教育大学研究報告 37, 87-100。
- 松田 惺・鈴木眞雄・富永健司 1988 親の子育てについての信念体系の検討 ―子どもの効力感との関連から― 愛知教育大学研究報告 38, 113-132。
- 松田 惺・鈴木眞雄 1990 子どもの効力感の発達 ―親の信念体系との関連から― 愛知教育大学研究報告 39, 73-82。
- 杉山晃一・桜井哲男 1990 韓国社会の文化人類学 弘文堂。
- 鈴木眞雄・姜 永吉・鈴木雅邦 1991 日本と韓国の子どもの効力感の発達の变化の比較 愛知教育大学研究報告 40, 121-133。